〔研究ノート〕

グラムシにおける「ホモ・ファーベル」問題に関する覚書

松田 博*

グラムシの「サバルタン・ノート」(「第25ノート」)の第3草稿は、「ホモ・ファーベル(工人)」問題に関する短文の草稿ではあるが、このテーマは先行する各「ノート」での考察と密接に関連している。第一に、それは「ホモ・エコノミクス(経済人)」問題の検討と関連している。第二に、「知識人論ノート」における「ホモ・サピエンス」論と関連し、その考察は一方では「知識人概念の刷新と拡張」と連動するとともに、他方では「労働概念の刷新」にも連動している。第三に、それは「産業主義」の新たな展開である「フォーディズム」型ヘゲモニーのもとでの労働の質的変容の問題と深く関連している。本稿は、以上のような観点からサバルタン(従属的社会集団)にとつての「ホモ・ファーベル」問題の意義に関する試論である。

キーワード：グラムシ、『獄中ノート』、サバルタン、ホモ・ファーベル、ホモ・エコノミクス、ホモ・サピエンス、フォーディズム

目次

はじめに

1. 「サバルタン・ノート」と「ホモ・ファーベル」問題
2. 「ホモ・エコノミクス」問題
3. 「ホモ・サピエンス」と「ホモ・ファーベル」
4. 「フォーディズム」と労働

おわりに

はじめに

この小論は、「サバルタン・ノート」と通称されるグラムシの「第25ノート」(以下Q25と略)、第3草稿の主題である「ホモ・ファーベル(工人)」問題にかんする試論である。す

でに別稿でも言及したが、このQ25はきわめて重要な内容を含む一連の「フォルミア特別ノート」シリーズのなかの一冊であるにもかかわらず、従来の研究において相対的に軽視されてきた「ノート」の一つである。したがってQ25に収録されている諸草稿およびその関連草稿の総体的検討は、近年着手されたばかりであり、とりわけこの第3草稿は、原文でわずか3行のみの短文ということもあって(C草稿では『獄中ノート』のなかで最も短文である)、これまで殆ど注目されてこなかった。そこには、これまでもたびたび指摘してきた『ノート』旧版(問題別選集)のみならず、校訂版の「限界」としてのQ25を含む一連の「フォルミア・ノート」の相対的軽視およびその一端としてのQ25軽視という無視できない問題性が伏在している。本

* 立命館大学産業社会学部教授
matsuda@ss.ritsumei.ac.jp

稿では、これまでのQ25の第1，第2草稿等の検討に続き，グラムシがこの短文の草稿をあえてC草稿としてQ25に「編入」した，その含意と構想の分析を課題としたい¹⁾。

1. 「サバルタン・ノート」と「ホモ・ファーベル」問題

グラムシの「サバルタン・ノート」(Q25)の第3草稿(Q25 § 3C)は，同「ノート」のなかで最も短文の草稿であるが，その全文は以下の通りである。

アドリアーノ・ティルゲル(Adriano Tilgher)，ホモ・ファーベル(Homo Faber)，西欧文明における労働概念の歴史(Storia del concetto del lavoro nella civiltà occidentale)，ローマ，Libreria di Scienze e Lettere，1929，L.15.²⁾

このC草稿に対応するA草稿はQ1 § 95Aであるが，全く同文である。すでに別稿で指摘したがQ25だけでなく大半のC草稿は，A草稿に加筆されたものであり，たんなる「機械的転記」ではないが，同草稿はA草稿と全く同一である点が注目される。というのはA草稿に加筆するためのティルゲルの著作をグラムシは獄中で入手できなかったが(それはグラムシが入手した文献リストに同書が含まれていないことから明らかである)，それにもかかわらずグラムシが「ホモ・ファーベル」というテーマを重視していたことを示している。『ノート』校訂版の同草稿注記には「書誌的事項はおそらく、『文芸イタリア(Italia Letteraria)』1929年8月11日号のコルラード・アルヴァーロの書評からとられている」と記されており，他になんらの解説も付されていない³⁾。同紙の「書評」の内容

は注記にはまったく言及されていないが，原文は書評というより短文の紹介記事である。評者は「今日の労働観にかんして，ティルゲルは独創的な提起をしている」と好意的評価をおこなっている。しかしながら同書の内容の具体的紹介や論評は見られない。1929年はファシズム体制が一層強化される年でもあり，後述するようにファシズムの労働観批判に通じるような内容への言及を避けたものと考えられる。

A. ティルゲル(1887～1941)は20世紀前半のイタリアの文学，演劇，哲学など広範な分野で旺盛な評論活動を行なった知識人で，グラムシはたびたび彼の著作について『ノート』で言及している。彼はイタリアおよび西欧の自由主義的思想の影響を受け，ファシズム下においても直接的ではないが反ファシズム，反ジェンティーレ的思想を貫いた知識人の一人であり，イタリアにおける実証主義的潮流にも批判的であった。またフランスの哲学者H. ベルグソン(1859～1941)の影響が顕著で，著書のなかでもベルグソンのホモ・ファーベル論を高く評価している。ここではグラムシが関心を抱きつつも入手，検討できなかった彼の著書『ホモ・ファーベル』の要点を簡潔に紹介しておきたい。グラムシがなぜこの著書に関心をもち続け，書名のためのC草稿をあえてQ25に記したか？という「謎」を解く一助となると考えるからである。『ノート』原本において同草稿は一行の余白も置くことなく，次の草稿に続いている。つまり最も短いC草稿であり，それだけにこのテーマつまりサバルタン論における「ホモ・ファーベル」問題にかんするグラムシの関心の強さを逆説的に暗示していると言い得るのである。サバルタン論に関する他のより長文の草稿でQ25のC草稿に収録されず，B草稿(暫

定草稿)のままの草稿が少なからず存在するなかで、この書名だけのC草稿にグラムシが込めた含意と構想を明らかにするには、この草稿の主題(ホモ・ファーベル論すなわち労働論)に関連する他の草稿群の検討が不可欠である。ここではグラムシが真に関心を抱いているのは、知識人論の一環としてのティルゲル論ではなく、彼が提起した「ホモ・ファーベル」論すなわち労働観をめぐる諸問題であることが、ティルゲルの著書の検討から明瞭となる。

ティルゲルは、「19世紀哲学における労働概念」(12章)で大要次のように述べている⁴⁾。つまり19世紀は労働概念が他の概念への従属から脱して「あらゆる世界観および生活観のキー概念」となる点に最大の特徴がある。それはカント、ヘーゲル、マルクス、ベルグソンの労働観に顕著である。彼は、その一例としてヘーゲル『法の哲学』に示された労働観をあげている。「もろもろの特殊化された欲求を満たすのに適した、同じく特殊化された手段を作製し獲得する媒介作用が労働である。労働は自然によって直接に提供された材料を、これらの多様な目的のために、きわめて多種多様な過程を通して種別化する」(196節)⁵⁾。またマルクスについては「高く飛翔した理論家 un teorico d'alto volo」として高く評価しているが、それは彼が「生産手段の変化が、人間社会の変革、革命の最終原因」であるとみなしたからである。同書の出版がファシズム体制が強化されつつあった1929年という背景を考えれば(『ノート』執筆開始の年でもあるが)、この指摘は重要である。さらに同章ではティルゲルが重視するベルグソンの労働観の意義が指摘されている。人間の本質の規定としての「ホモ・ファーベル」論を探究したのがベルグソンであり、ティルゲルには

彼の影響が濃厚であるが、ティルゲルは「ベルグソンによって、ホモ・ファーベルはホモ・サピエンスの同義語となった」と重要な指摘をしている⁶⁾。彼はベルグソンの『創造的進化 Evolution creatrice』(1900年)を高く評価しているが、ベルグソンは同書のなかで「知性は何よりもまず製作を目ざすもの」であり、かつ「人間は社会をなして生きる存在」であるから、真の「製作」のためには「他人の知性と連携」することが不可欠と述べている⁷⁾。さらにティルゲルは言及していないが論文集『思想と動くもの』のなかでより明確に彼の見解が述べられている。「私は、物質的にも精神的にも創造し、事物を工作し自分自身をも工作するのが人間の本質だと信じている。『工作人(ホモ・ファーベル)』というのが私のもちだしている定義である」⁸⁾。

さらにティルゲルは「社会主義体系における労働観」(13章)では次のように指摘している。すなわち、伝統的労働観は貧困、物欲、強制などにもとづくネガティブなものであったが、「空想的」あるいは「科学的」を問わず社会主義思想における労働観は、人間社会にとってポジティブかつ人間的なものであり、とくにマルクスは労働を彼の哲学の中核概念とした。「かくして労働は人間にとって最も尊厳かつ高貴なものとなった」のである。なぜならマルクスにとって「哲学すること(Filosofare 知的活動の意)は、行動すること、生産すること、労働すること」であり、かつ「世界を認識することは、世界を変革すること」であり、したがって「真の哲学者は、労働者(Il vero filosofo è il lavoratore)」に他ならないからである⁹⁾。

またティルゲルは、ボルシェヴィキおよびファシズムの労働観にも言及している。両者に共

通するのは「いずれも国家観の全般的枠組み」のなかに労働が位置付けられている点である。つまり労働概念は前述したような自律性・自発性を失ない、国家（後者においては民族も含まれる）に規定され、かつそれに従属する下位概念となる。彼は詳しい分析を行なっていないが、その含意は両体制下における労働の能動的かつ自律的・人間的内容の喪失と言ってよいであろう¹⁰⁾。

以上の概観から、グラムシがティルゲルの著書ととりわけ「ホモ・ファーベル」論に強い関心を抱き、その著書名のみをあえてC草稿としてQ25に記したことの真の意図が浮かび上がってくるといえよう。それは労働論とりわけ精神労働（ホモ・サピエンス）と肉体労働（ホモ・ファーベル）の相互関連に関するグラムシの一貫した問題意識の現れであり、かつ歴史的には資本主義的ヘゲモニーのもとでの人間類型たる「ホモ・エコノミクス（経済人）」問題に他ならない。つまりQ25のこのC草稿が意味するのは、先行する各「ノート」における「ホモ・エコノミクス」（Q10）、「ホモ・サピエンスとホモ・ファーベル」（Q12）、「フォーディズムと労働」（Q22）などの諸問題と内容的に密接に関連しているのである。換言すれば、このメモ的な草稿はグラムシにとって、サバルタン論とホモ・ファーベル論＝労働論との「接合」にグラムシが深い関心を抱いていたことの刻印に他ならない。それはサバルタン問題がたんなる「上部構造」次元の問題（グラムシはとくに言語、文化、宗教、教育、コモン・センスなどの諸契機を重視している）のみならず、歴史的諸条件に規定された「生産の世界＝（下部）構造」次元の問題、あるいは「構造と上部構造」の総体つまり「歴史のブロック」に関わる問題であることを

グラムシが自覚していたことを示唆するものである。それはまた後述するように「ホモ・エコノミクス」論が、たんに「（下部）構造」次元の問題のみならず、「上部構造」次元の問題でもあることをグラムシが強調している点とも内在的に照応しているのである。

2. グラムシと「ホモ・エコノミクス」

前述したごとくグラムシの「ホモ・ファーベル論」の含意と構想に接近するには、関連する草稿のなかでも「ホモ・エコノミクス（Homo economics 経済人）」に関する諸草稿の検討が不可欠である。この主題に関する草稿は、Q10（クローチェ論）の第 部 に収録されている。このQ10は、クローチェの哲学・思想にたいするグラムシの見解を知る上できわめて重要な「特別ノート」であるが、ここでは行論の関係上、前述の主題に関連する草稿を検討する。

第一に、グラムシは、「ホモ・エコノミクス」が歴史的条件に規定された概念であり、したがってそれは抽象的かつ普遍的概念ではないことを強調している。彼は草稿のなかで次のように述べている。

「ホモ・エコノミクス」の概念をめぐる論争は、いわゆる「人間本性 *natura umana*」に関する数多くの論争の一つとなった。論争者たちは、それぞれ自己の「信念 *fede*」をもっており、それを主として道徳主義的な根拠にもとづいて裏付けようとしている。「ホモ・エコノミクス」とは、特定の社会形態の経済活動、つまり特定の経済構造の抽象化されたものである。いかなる社会形態も、みずからの「ホモ・エコノミクス」を、つまり自己の経済活動をもっている。「ホモ・エコノミクス」の概念が科学的価値をもたないと主張することは、経済構造とそれに照応する活動とが根本的に変化

し、あるいは経済構造がおおきく変化し、この新しい構造に適応するためには、経済行動の方式も必然的に変化しなければならない、ということの主張にほかならない。しかしまさに意見の相違はこの点にあり、しかもこの相違は、科学的、客観的な相違というよりも政治的相違なのである¹¹⁾。

グラムシの論旨は明確である。つまり「歴史的概念」としての「ホモ・エコノミクス」は同時に「政治的概念」でもある、という点である。つまり経済構造の変化、変動の担い手が、いかに「上部構造」の担い手とくに「国家指導の担い手」に転化し得るのか、という問題が中心的論点となる。サバルタン論との関連では、サバルタンつまり従属的社会集団が、いかに「指導的集団」つまりヘゲモニー集団に転化し得るのか、という論点に他ならない。彼は同草稿の後半で、次のように指摘している。

経済構造と立法権力、強制力をそなえた国家とのあいだには市民社会が存在している。この市民社会が、ただ学者の著作や法律上だけでなく、具体的かつ根本的に変わらねばならないのである。国家は市民社会を経済構造に適応させるための用具といいうるが、しかし肝心なのはこの国家は「みずからの意志として」その変化を実現しようとするということである。すなわち経済構造に生じた変化の担い手が、国家を指導するということが肝心なのである¹²⁾。

「(下部)構造」から「上部構造」への「ホモ・エコノミクス」問題の転化というグラムシの問題意識の背後には、前述したサバルタン集団のヘゲモニー集団への転化の探究(後述するように、そこには「労働論」の再検討も含まれる)が伏在する。この点に関し、グラムシは次のように述べている。

「ホモ・エコノミクス」(というカテゴリー、引用者)もまた、全体として不明確とはいえ、歴史的に規定されたものであり、固有の抽象である。この過程は、批判的経済学において認められるが、それは価値を使用価値としてではなく交換価値としてとりあげ、したがって潜在的には、使用価値を交換価値に還元する。その意味するところは、交換経済が、生理的慣習や、趣味および有用性にたいする満足度などの心理的尺度までも変化させ、かくしてそれは基本的な経済的与件つまり経済学の対象ではなくなり、「上部構造」として表われる、ということである¹³⁾。

さらにグラムシは、「ホモ・エコノミクス」問題が、資本主義社会における「労働」の問題にそれはまた「ホモ・ファーベル」論に接続するが深く関わる問題であることを強調している。彼は次のように強調している。

経済学の出発点がこれであり(富の源泉としての自然と労働の研究、とくに後者 引用者)、かつ経済の根本的概念がこのように位置付けられるとすれば、その後のあらゆる研究は「労働」概念の理論的深化以外にありえない。この概念は、産業や活動といったより一般的な概念に併合され得ないだろう。むしろ、あらゆる社会形態において平等に必要な、かの人間の活動のなかに位置付けられねばならないだろう¹⁴⁾。

さらにグラムシは、資本主義社会における「寄生層」の必然的増大を論じた草稿のなかで、以下のように指摘している。

よく考察すれば、つぎのことを結論に加えることができる。つまり指導階級(la classe dirigeante)のすべての人員が理想とするのは、その子孫達が労働せずに、利子で生活できるような条件を作り出すことである。労働しなくてもよいという目的のために労働する社会が、どうして健全な社会と言い得るだろうか?この理想は不可能かつ不健全

であるがゆえに、その組織全体は腐朽し、病的になっていることを意味している。寄生者を作るために労働するような、いわゆる過去の労働（これは他人の現在の労働を示すメタファーであるが）によって生活することをよとするような社会は、実際は自己自身を破壊しているのである¹⁵⁾。

以上簡潔に要約した諸論点からも明らかなごとく、グラムシにとって「ホモ・エコノミクス」問題とは、「(経済)構造」における生産=労働の担い手がいかにして「上部構造」における指導的ヘゲモニー集団、「国家活動の担い手」に転化しうるかという、歴史的かつ理論的なヘゲモニー論深化の探究と密接に関連している。つまりサバルタン集団における自律性の獲得、拡充過程は、資本主義的「ホモ・エコノミクス」像の克服、「(経済)構造」の次元のみならず「上部構造」次元へと質的に発展・転化しうる新たな「ホモ・エコノミクス」、つまり社会的・文化的・政治的次元とりわけ「国家」的次元におけるヘゲモニー集団形成の弁証法的論理の探究に他ならない。サバルタンの「サバルタン性=従属性」の克服過程の探究は、その不可避の一環である。

3. 「ホモ・サピエンス」と「ホモ・ファーベル」

グラムシは、Q12（いわゆる「知識人論ノート」）において「知識人」概念の「刷新と拡張」に取り組んだが、その重要なモメントとして精神的・知的労働と肉体的・筋肉的労働の機械的二分論を批判し、両者の相互補完的（=弁証法的）関連性および社会構成体（=歴史的ブロック）の次元における、知識人・民衆間関係の歴史的特質（ヘゲモニー関係の具体的な形態の解明の一環として）の解明をおこなった¹⁶⁾。こ

では前述のテーマに関する検討を行ないたい。すでに前節でも若干触れたように、このテーマは、サバルタン論と労働論との内在的接点の解明と深く関連している。

まずグラムシは、精神労働と肉体労働の機械的二分論を「方法論的誤謬（l'errore metodico）」として、次のように述べている。

もっとも一般化している方法論上の誤謬は、知的活動（およびそれを体現する諸集団）が社会的諸関係総体のなかに見いだされるような、諸関係の体系的総体内部にこの区別（知的活動と他の社会的諸活動の区別 - 引用者）の基準を求めずに、知的活動それ自体の内部に求めたことにあると考え得る。たとえば労働者（operaio）やプロレタリア（proletario）はたしかに肉体労働や道具による労働によって特別に特徴づけられるのではなく（完全な肉体労働というものは存在しないし、また「調教されたゴリラ」というテイラーの表現も一定の方向におけるある限界を示すためのメタファーである。つまりどのような肉体労働においても、それがもっとも機械的で低水準の労働であっても、最小限の技術的能力すなわち最小限の創造的な知的活動が存在することの考察はべつとしても）、一定の社会的諸条件および社会的諸関係における労働によって特徴づけられる¹⁷⁾。

またグラムシは別の草稿においても、さらにこの問題を二方向で掘り下げている。つまり一方では、前述した「知識人概念の刷新と拡張」の方向であり、他方では「労働」概念の機械的二分論の克服の方向である。前者についてはすでに別稿で検討したので¹⁸⁾、ここでは後者の論点を検討しておきたい。グラムシは次のように述べている。

知識人と非知識人とを区別する場合、現実的には知識人の職業上の分類（カテゴリー）の直接的

な社会的役割を意味しているにすぎない。つまり特定の職業的活動の比重が主として知的発展の方向に向いているのか、あるいは筋肉的・神経的労力の方向にあるのか、ということが考慮されているのである。このことは、知識人について語ることは出来ても、非知識人について語ることは不可能であることを意味する。なぜなら非知識人は存在しないからである。しかしながら、知的・頭腦的發展の努力と筋肉的・神経的の努力との関係は常に同一とはかぎらず、それゆえ固有の知的活動には様々な段階が存在するのである。あらゆる知的活動を除外し得るような人間活動は存在しないし、ホモ・ファーベルをホモ・サピエンスから切り離すことは出来ない¹⁹⁾。

グラムシにとって「ホモ・ファーベル」は、たんなる全一的な「筋肉労働者」ではなく、また「ホモ・サピエンス」もまた同様の単なる「頭腦労働者」ではない。前者における知的・精神的要素、後者における肉体的要素および両者の相互関連こそグラムシが短絡的な「機械的二分割論」批判を超えて強調したかった点に他ならない。つまりサバルタン問題との関連で言えば、労働者（プロレタリア）＝「筋肉労働者」というステレオタイプを克服し、すべての人に「一定の発達水準で存在している知的活動を批判的に発展させる」こと、さらに「労働」内における知的要素の向上のみならず、その「外部」においても「世界観の変革」や「新しい思考様式の創出」という知的活動が、サバルタンの「従属性」を克服し、その「自律性」の次元・領域を拡充していくために不可欠な課題となる、という点が、グラムシがこの草稿に込めた含意と言えよう²⁰⁾。グラムシは、幼年期からの「精神的集中力」の修得など「適切な精神的・肉体的習慣」を獲得できなければ「40才の研究者が、どうして16時間も続けて机に向かうことが出来るだろうか」という辛辣な評言を記

しているが²¹⁾、それは機械的労働観にもとづく「知識人」概念の矮小化にたいする批判というだけでなく、サバルタンの知的・文化的自律性の獲得過程における独自の困難性を直視した表現であった。「伝統的に（学習への心理的・肉体的適応にたいして 引用者）それにふさわしい態度を発達させてこなかった社会集団から、最高度の専門家にいたるまでの、新たな知識人層の形成が求められるとすれば、空前の困難（*difficolta inaudite*）を克服しなければならないだろう」と彼は強調している²²⁾。

グラムシは「学習もまた、知的な訓練（*tirocinio*）だけでなく、肉体的・神経的な特別な訓練を要する大変労苦の多い仕事（*mestiere*）であることを、多くの人に理解させる必要がある」とか「民衆の多くは、学習の困難性のなかには彼らを不利にするなにか『トリック（*trucco*）』があると（あるいは生まれながらの愚か者と）考える」と述べているが、それはまさにこれまで検討してきた労働観刷新のための探究の理論的かつ歴史的要点を指摘したものであると言えよう²³⁾。

グラムシは教育と労働について論じた草稿のなかで「労働（理論的・実践的活動）の概念と事実」について、次のように述べている。

人間の理論的・実践的活動たる労働に基づく社会的秩序と自然的秩序との均衡の概念は、あらゆる魔術や呪術から解放された直観的世界観の初歩的な諸要素を産み出す。また、それは運動と生成を理解し、現在が過去にたいして負い、未来が現在にたいして負う努力と犠牲の総体を評価し、現在を過去の総合として、あらゆる過去の世代の総合として、未来に反映されるものとして、歴史的、弁証法的世界観のより一層の発展の足場となるものである²⁴⁾。

以上の諸点から、グラムシが「ホモ・ファーベル」および「ホモ・サピエンス」というメタファーによって強調したかったのは、たんなる労働の機械的二分割論批判だけではなく、「生産世界」における従属的労働から脱却し、その自律性を拡充していくには、「(下部)構造」次元のみならず「上部構造」次元においても「労働概念の刷新と拡張」を遂行し（知識人論との接合など）、「ホモ・ファーベル」と「ホモ・サピエンス」の理論的・実践的統合というサバルタン集団にとって「空前の困難」を伴う課題認識の重要性であった。というのはそれなしには、サバルタン諸集団の労働と生活内部および社会意識に深く浸透した（ほとんど常識 *senso comune* やフォークロアと化した）そのサバルタン性（従属性）の克服およびその自律性の獲得と拡充は不可能であるからである。グラムシは「技術 - 労働 *tecnica-lavoro* から、技術 - 科学へ *tecnica-scienza* へ、さらに歴史的人間主義的思考（*concezione umanistica storica*）へ」の過程が不可欠であると述べているが²⁵⁾、「ホモ・ファーベル」と「ホモ・サピエンス」との分断克服の探究は、まさにその起点であったと言い得るし、Q25の第3草稿で論題だけながら「ホモ・ファーベル」論への強い関心を暗示したのも、まさに前述した論点をグラムシが各「ノート」で継続的に探究していたことを示すものであったことの証左であった。

4. フォーディズムと労働

グラムシは、「産業主義」の発展にともなう「労働」の変容について、歴史的にはそれが労働の「外部」からの「機械的抑圧（*compressione meccanica*）」に起因することをQ22の草

稿で次のように述べている。

今日に至るまで、生存と生活の様式におけるあらゆる変遷は、残酷な強制（*coercizione brutale*）によって、すなわち社会の生産的諸勢力全体に対する一定の社会集団の支配を通じて、為されたものである。すなわち新しい文明の型、つまり生産と労働の新しい形態に適した人間の選択ないし「教育」は、弱者や抵抗者を下層階級（*sottoclassi*）の地獄に投げ込むか、あるいは彼らをすべて排除するという、かつてない野蛮な所業を通じてなされた²⁶⁾。

このような「産業主義」の20世紀的展開である「科学的管理」（テイラー主義）やそれに基づく「フォーディズム」（グラムシのQ22の主題である）においても、労働の「外部」からの「抑圧」や「強制」という契機には、本質的变化はありえないと、グラムシはみなした。しかしながら労働主体によってそのような外在的要因が変革されるならば、それは内発的均衡に転化し得ることも指摘している。つまり労働の内部、外部を問わず生産＝労働主体が「抑圧」や「強制」に服従せず、「ホモ・ファーベル」と「ホモ・サピエンス」の統合の能力を獲得しうるかいなかに、それはかかっている。グラムシは次のように指摘している。

勤労者の機械的、自動的動作を最大限発展させること、かつ勤労者の知性、想像力、発意の一定の参加を要した職能的熟練労働が有する旧来の精神的 - 肉体的紐帯を打破すること、さらに生産的諸活動を機械的肉体的側面のみに還元すること。しかし現実にはそれは独創的な新しさではなく、産業主義それ自体の形成によって開始された長期的過程の最新局面にすぎないのである。この局面は、これまでになく激烈なものであり、より残酷な形態をとるが、従来とは異なる型の、あきらかにより高次の型の精神的 - 肉体的紐帯の創造によ

って克服されるであろう。選択の強制が生じるのは不可避的であり、旧来の勤労者階級の一部は労働の世界から、おそらく世界そのものから無慈悲に排除されるであろう²⁷⁾。

この草稿については、すでに別稿で検討したので省略するが²⁸⁾、グラムシが強調しているのは、労働の「外部」からの強制的な「圧力」によってではなく、生産＝労働主体による内発的な精神的・肉体的「均衡」の獲得、換言すれば生産者、「ホモ・ファーベル」としての自律性の獲得、従属性の克服の重要性に他ならない。サバルタンの「ホモ・ファーベル」から、自律的ヘゲモニー的「ホモ・ファーベル」へ、この論点においてQ22とQ25は内在的に「連結」するのである。

したがってこのような「フォーディズム」型労働の担い手にとっても、問題は「労働」内部の問題つまり「(下部)構造」次元の問題としてのみならず、「労働」観念の支配的イデオロギー、つまり経済的、政治的、文化的ヘゲモニーに全面的、総合的に対抗することなしに、自己の労働と生活の自律性を保持し、拡充することは不可能となる。またそれは労働主体の「精神的・肉体的均衡」の内発的・文化的発達を促進する「エリート」(すなわち有機的知識人)をその内部から「産み出す」ことに成功するか否かが決定的に重要な契機となる。「量」と「質」との相互転化が問われる局面といえる。グラムシは言う。支配的イデオロギーと闘争するための「歴史的課題のために必要なエリート層を創出すること、あるいは少なくとも彼らの役割が人間の諸活動のあらゆる領域に広がるよう彼らを成長させること²⁹⁾。それはまた前述した「Q12(知識人論ノート)」におけるサバルタン集団における「知識人」創

出の「かつてない困難性」の問題とも関連している。つまり「労働」をめぐる問題は「知識人」論と不可分であり、その意味でも「ホモ・ファーベル」と「ホモ・サピエンス」とは切り離し得ない。この両者、両契機の理論的総合の探究こそ、「熟練の解体」を含む「フォーディズム」型労働の克服という現代的課題と緊密に関連しているのである。

かつてH. プレイヴァマンは労働の「科学的管理」が、第一に「労働者の技能から労働過程を引き離すこと」つまり労働者の熟練、経験、知識の労働過程からの排除をもたらし、第二に「実行からの構想の分離」つまり労働者にとって「自分自身の労働とその遂行様式にたいする統制権」の放棄をもたらし、第三に管理側による、労働に関する「知識」の排他的独占とそれにもとづく「労働過程の各段階とその遂行様式」の統制をもたらすことを分析した³⁰⁾。それは生産的活動としての「労働の衰退」を結果せざるをえないのであるが、グラムシは前述したごとく、生産＝労働の内外において、とりわけ「上部構造」次元において「ホモ・ファーベル」と「ホモ・サピエンス」との理論的・実践的統合の条件が形成され、サバルタンの従属性の克服を含むその自律性拡充の志向が発展する必然性を有しているとみなした。その意味で生産＝労働の担い手としてのサバルタン集団にとって「フォーディズム」は、自己のヘゲモニー創造能力を「錬成」するための「産業主義」の高度な局面に他ならなかったのである。

おわりに

この小論では、Q25において論題のみ記された第3草稿の含意を、先行する各「ノート」に

おけるグラムシの探究の軌跡を辿りつつ、その輪郭を素描してきた。それはまた、グラムシはなぜ論題のみの草稿をQ25に記したのか、という「謎」に接近する試みでもあった。またこの探究を通じて、各「ノート」の各草稿が、それだけで自己完結するのではなく、あたかも地下茎のごとく連結していること、つまりQ25の草稿とQ10、Q12、Q25の各草稿には緊密な相互関連性があることを検討してきた。

したがってサバルタン論は、その従属性の克服、自律性の拡充にかかわる「哲学・思想」次元、およびその主体的発達の課題を展望する「ホモ・ファールベルとホモ・サピエンス」の理論的実践的統合論、さらに労働の産業主義的「合理化」にともなう「支配的ヘゲモニー」に対抗し得る「独創的な生活体系」創出という歴史的、理論的課題と内在的に関連した探究であった。それゆえサバルタン論はけっして自己完結的な個別論題ではなく、各論題を貫く横断的かつ基軸的テーマの一つと言い得る。換言すればサバルタン論（Q25）と哲学、知識人、アメリカニズムなどの先行する「特別ノート」との間には多面的かつ重層的な「相互翻訳関係」が内在するのである。未完に終わったとはいえ、グラムシがQ25にこめた構想と含意は、先行する各「ノート」で取り組まれた諸論題の結節点を示しているといっても過言ではない。この小論は、Q25の第3草稿に関する試論ではあるが、後続の各草稿分析において、前述の諸点に関する検討をQ25の草稿に内在しつつ継続することが残された今後の課題である。

注

- 1) 拙稿「A. グラムシにおけるサバルタン論の生成に関する覚書」、本誌39巻1号、2003年6月、同「グラムシと千年王国運動」前掲39巻2号、03年9月、参照。
- 2) QC, p2284
- 3) QC, p2520 邦訳、大月版523ページ。
- 4) A. Tilgher, Homo faber, cap. XII, pp83-91.
- 5) ヘーゲル『法の哲学』196節、邦訳、藤野・赤沢訳、中公クラシックス、116ページ。なお197節、204節も参照。
- 6) A. Tilgher, ibid, pp83-91
- 7) 邦訳、岩波文庫、真方敬之訳、187、192ページ。
- 8) 邦訳、岩波文庫、河野与一訳、125～126ページ。
- 9) A. Tilgher, ibid, pp101-103.
- 10) Id. p105, p109.
- 11) QC, p1253
- 12) QC, p1254
- 13) QC, p1276
- 14) QC, p1264
- 15) QC, p1343
- 16) 拙著『グラムシ研究の新展開』御茶の水書房、2003年、第4章参照。
- 17) QC, p1516
- 18) 前掲拙著、第4章参照。
- 19) QC, p1550
- 20) QC, p1551
- 21) QC, p1554
- 22) QC, p1550
- 23) QC, p1549-50
- 24) QC, p1541
- 25) QC, p1551
- 26) QC, p2161
- 27) QC, p2165
- 28) 拙稿「現代社会像への示唆 - フォード主義と受動的革命」、編著『グラムシを読む』法律文化社、1988年、第2章参照。
- 29) QC, pp2163-64
- 30) ブレイヴァマン『労働と独占資本』、富沢賢治訳、岩波書店、1978年、126～134ページ。